

グロテスク～ Aゴシックすごい

GE Gravenによる



第6章



食堂ホールの周囲には、ベンチテーブルが端から端まで並べられていた。

テーブルは、飛梁とリブを備えた巨大な柱の平行な列に沿って並び、高いアーチ型の天井に向かって不気味な爪のように広がっていた。ホールの中心には巨大な鉄製の火盆が並び、地獄のような燃えさしが絶え間ない寒さを遮っていた。食事を終えた数人の修道士がホールに残り、常駐の修道士、従者、そして修道院のあらゆる扉や隅々に警備しているように見える歓迎されない兵士たちとの日々の衝突に関する最新の噂を囁き合っていた。イワンはテーブルから魚のシチューとパンの入ったボウルを持ち上げ、まばらな集まりを離れて食堂の外に出たところ、息を切らしたオディーノ修道士が危うく彼を轢きそうになった。

「オディーノ！危うく落とすところだったぞ！」イワンは彼を叱責した。「どこに行ってたんだ?!」オディーノはイワンの批判的な視線を追って、飛び散った魚のシチューで汚れたイワンの袖に目を落とした。

オディーノは息を呑んだ。「許してくれ、イワン。話さなければならぬ。今すぐに。」オディーノは彼を建物の外側の角へと連れて行った。

"について?"

「新しい枢機卿はゲートストーンを開放するつもりだ！」オディーノはささやいた。イワンは信じられないといった様子で背もたれにもたれかかり、目を細めた。「私は真実を語っている。」

「ワインを飲むのは少し早すぎるかな？」

「私を信じてください。」

「オディーノ、もうすぐ修道院を出よう。拍車は必要ない。」

「イワン !私は酔ってないし、あなたを煽っているわけでもない。これは偶然耳にしたんだ 彼自身の言葉だよ。」

イワンは彼の抗議を一蹴した。「素晴らしい。では、ラザロに残りの食べ物を持って行ってあげようか。」

イワンが立ち去ろうとした時、オディーノが彼の腕を強く掴んだ。

「イワン！」

「オディーノ？」

「こいつらは教皇の衛兵じゃない。アヴィニオン出身ですらない !ボーン大尉は王室近衛兵だ。フィリップ国王陛下の命令を受けているんだ。本当だよ、彼らの会話を耳にしたんだ！」

イワンは袖に手を当てた。「お願いだから、腕を離してくれ。」オディーノはそれに従った。「さあ、聞いたことを話してくれ。」イワンは腕をさすりながら言った。

「私は浴場の窓の下にいました。中からは、マッソン修道院長と隊長の声が聞こえました。」船長の部下たちの食糧不足をめぐって、船長は修道院を去ると脅した。修道院長はすぐに門石を開けると約束したが、船長は3日間の猶予を与えた。修道院長はそれに同意した。

「何だって？ !冗談だろ。」イワンは顔をしかめて問い詰めた。「奴らはやって来たんだ」

オディーノはイワンの肩を揺さぶり、最大限の注意を促した。「それだけじゃない !クロディウス・グレヴィルとグレートが彼を手伝うんだ。それに、彼らは祭壇の頂石の取り外し方を知っている。そして、彼らは枢機卿に指導することに同意したんだ、イワン！」

「なぜ彼らはこれに同意するのだろうか ?全く理解できない。」

「しかし、これはクロディウスにとっては都合が良い。彼は枢機卿に、我々の要職を譲ってもらう代わりに、彼らの協力を得ようと画策してきたのだ。そして枢機卿は、もし彼が成功した場合、クロディウスとグレヴィルをカタコンベの新たな監督官に任命することに同意した。」

「しかし、枢機卿が門石を開けることに何の意味があるのか ?そこからどんな良いことが生まれるというのか」

「それをイングランドに対する武器として使うつもりだ。聞いたところによると、彼はそこから精霊を呼び出し、クレシーでエドワード王の兵士たちに差し向けようとしているようだ。

フィリップ国王陛下もこれに関わっているが、私は陛下は何も知らないのではないかと疑っている。

すべてが悪夢だ。まるで現実のこととは思えない！

イワンは考え込んだ。「確かにそうだ。だから我々は誰も修道院の門から出ることを許されないし、兵士がこんなにたくさんいるのも納得がいく。」

「そして警備員が郵便物を押収した」とオディーノは付け加えた。
イワンは頬をこすった。「なんてことだ、これは大変だ。恐ろしい。」
「ラザロはどうする？彼はクロディウスに報告しなければならない。フードを被ったミゲルと一緒に彼を呼び戻せ。」

イワンは6年前のことを思い出した。クロディウスが他の従者たちの前でミゲルに頭巾を脱ぐよう要求した時のことだ。ヴォニグ修道院長は、体の不自由な少年たちが尊厳を守るために頭巾を被ることを常に許可していたが、クロディウスは独断でそうしたのだ。イワンはそのことを知ると激怒し、オディーノが止めなければ、クロディウスを殴っていただろう。イワンはクロディウスに、ミゲル、タテウス、そして特にラザルスのために縫った頭巾に触れないよう警告していたが、わだかまりは残っていた。

「枢機卿が門石を開けてしまえば、管理すべき地下墓地はおろか、修道院さえもなくなってしまうだろう」とイワンは独り言のように呟いた。「ラザロをここから連れ出さなければならない。おそらく明日の夜には。君も一緒に行くか？」

「はい、でもどうやって移動すればいいのでしょうか？」

「空の補給荷車がまだ厩舎のそばに残っているのか？」

「フェストノーの死後、隊長は厩舎を警備させている。荷車に近づくことすらできない。運が良ければ、追跡されることなく馬一頭だけを盗み出すことができるかもしれない。」

イワンは遠くの敷地を見つめながら言った。「徒歩で立ち去る以外に、我々に残された道はないようだ。」

「一番近い村はムラトで、歩いて行ける距離ではない。我々がラザロに朝日が昇る前に」

「数年前にニコラス修道士が見せてくれた洞窟を覚えていますか？彼はそれを『山の口』と呼んでいましたよね？」

「ああ、それは深く暗いんだ！」

イワンは空を見上げた。「山の口だ。ここから真西にちょうど位置している。星が道しるべになるだろうし、月が道を照らしてくれるはずだ。ラザルスを準備する。お前は台所で何か探し出してくれ。三人分だ。そして、十分な量、たとえほんの少しでも持ってきてくれ。」

3人からなる軍隊は、その腹を頼りに旅をする。兵士たちが食事を終えて何も残らなくなる前に、逃げ。

"はい。"

「それから、大きな水袋を3つ。全部地下墓地に持ってきてくれ。物資を持っているところを見つからないように気をつけろ。隠しておけ。それからオディーノ、誰にも言うなよ。ラザロのためにも。誰にも知られてはいけない。ニコラスが君にとってどれほど大切な存在か、私にはわかる。」

「心配しないで。分かってるよ。」

「もしあなたが拘束されたら、私たちは自力で去らなければなりません。ラザロは

すぐにここに来てください。

「もちろんです。明日、もしくはその直後に、マウンテンマウスへ食料を届けます。」

二人は別れ、イワンは地下墓地へ、オディーノは食堂の厨房へと忍び寄った。その時になって初めて、グレヴィル修道士が食堂の隅から姿を現した。彼は鋭い視線を二人の方向に向けてから、修道院長の事務所へと急いで逃げ去った。

イワンは小さな鉢を持ってカタコンベの通路を急いで進み、部屋に入った。ラザルスはイワンに背を向け、テーブルのそばに立ち、新しい松明を包んで置いていた。すでに準備された大量の松明の山の中に。

「修道士様、ほとんど全部揃いました。仕上げるにはもう少し布が必要です」とラザロは言った。彼は振り返ってイワンの方を向いた。二つの虚ろな目穴がシチューの入ったボウルに落ちた。

「そのままにしておけ。さあ、食べよう」とイワンは言った。彼は振り返って、器を持って出て行った。ラザロは彼の後について行った。二人はラザロの部屋から離れた、地下墓地の奥深くへと進んでいった。ラザロは普段、その部屋でシチューをすすっていたのだ。

「修道士様、私たちはどこへ行くのですか？」

「さあ、息子よ。二人きりで話さなければならない。」ラザロは彼の後について、トンネルをくぐり抜けていった。

イワンはバストン家の地下納骨堂の扉の前で立ち止まった。そこは3世紀前にガルディアン修道院長を務めたクレア・バストン司教にちなんで掘られ、名付けられた墓だった。イワンはパチンと音を立てて扉の門を外し、ラザルスと共に中に入った。

イワンはラザロに鉢を渡し、地下室のろうそくに火を灯した。東と南の壁には、高さ7体のミイラが縦長に、2フィート（約60センチ）の壁の溝に横たわっていた。滑らかな西の壁には、簡素な木製の十字架が掛けられていた。部屋の中央には、粗削りの木彫りの瞑想台があり、扉の横には細長いうろうそく台があった。ラザロは鉢をその台に置き、椅子に腰を下ろした。イワンは近づいて、彼の向かい側の椅子に座った。

「魚とパン。そう、ほとんどパンだけど、食べなきゃいけないんだ。食堂にはほとんど残っていないからね。」

「はい、修道士様」ラザルスは独り言のようにぶつぶつ言った。彼はパンが嫌いになっていた。修道院の定番である古くなったパンは、食欲を満たすというよりは、胃袋を膨らませるためのものだった。肉の方がずっと美味しかった。特に魚は。そして、頻繁に、肉の塊が毎晩の夕食用の椀に入ったパンはひととき大きく見え、彼は「地主の息子はパンだけで生きるのではない」と心の中でつぶやき、暗記していた聖書の言葉に不遜なひねりを加えた。

「ラザロよ、これからは私を父と呼んでいいぞ。」ラザロは顔を上げ、イワンの

微笑む。イワンは、二人きりの時はいつもラザロに「父さん」と呼ばせていた。

「はい、お父さん」と彼は言い、魚にかぶりついた。

「明日の夕方には修道院を出発するぞ、息子よ。」

ラザロは凍りついた。興奮がラザロの心に爆発し、彼は自分が聞いたことを確かめるために父親の顔をじっと見つめた。

「ええ、そうです。オディーノ修道士も同行します。」

ラザロは飛び上がり、テーブルの周りを回り、大きくてがっしりした体格の修道士に小さな腕を回して抱きついた。

イワンは彼を抱きしめ、軽く肩を叩きながらくすくす笑った。「さあ、食べなさい。時間がないんだ。」イワンは彼を再び食事へと促した。ラザロは新たな活力を得て、食事をむさぼり食った。

「魚の骨は容赦ないぞ、ラザロよ」とイワンは説教した。

「はい、父上。」ラザロはゆっくりと慎重に食事をし、心の中で湧き上がる喜びの渦を抑えようとしたが、ほとんど効果はなかった。

「食事の後、井戸から水を汲んできてください。ローブとフードは洗濯が必要だ。

すると、まるで冷たい風が吹き抜けたかのような、何かの異変が彼の思考を遮った。ラザロは視線をドアの方へ向けた 精神的な冷え込みの原因へと。

「私たちが…何だ？」イワンは、くぐもった遠い声で尋ねた。

ラザロはそれを感じていた 戸の外に何か、全く新しい、しかし本能的に見覚えのある感覚。恍惚とした状態が彼を包み込み、視覚、聴覚、嗅覚以外のすべてが消え去った。

「誰か来たのか？」イワンはささやいた。ラザロの疑念は正しかった。彼はドアの音を聞いた。パチパチと音がして、まるで何かかなり大きなものが、ますます重くのしかかっているかのようなようだった。イワンはドアまで歩いて行き、肩をドアに押し付けた。しかし、ドアは開かなかった。

「扉の向こうにいるのは誰だ、ラザロ？」イワンはささやいた。

「ドアはひとりでに押される。」

「いや、ラザルス。耳を澄ませ。外には何人いるんだ？」

「足音も、衣服の擦れる音も聞こえなかった。それに、息遣いも聞こえない。誰もいないんだ」とラザルスは言った。イワンはため息をついた。

「父上、告白しなければならないことがあります」とラザロはささやいた。

"それは何ですか？"

「あの前の晩、門石が叫び声をあげた時」ラザロはうつむいた。

「さあ、ラザロ、それを吐き出せ。」

「私は、ええと、心の中で、門石の声を聞いたんです。門石は私の母だと名乗り、私を訪ねてくると言いました。」

「あなたは誰と話したのですか？！」

「お許してください、修道士様。私はただ」

「なんてことだ !ラザロ、君は私たち二人を大変な危険にさらしたんだ !」イワンは顔をこすりながら、慌てて部屋の中を歩き回った。

「私は集めなかったし、あなたは私に話すことを禁じた」
「もうその話はするな。心を落ち着け。さあ、出発だ。」

「はい、修道士様。」

イナゴのような羽音が静寂を破った。父と息子は二人とも部屋を見回した。甲高い鳴き声は、10匹のイナゴ、そして100匹のイナゴの羽音にまで膨れ上がった。ますます大きくなっていった。ラザロは座り込み、両手で耳を覆い、テーブルに頭を伏せた。イワンの大きく見開いた目は部屋中をきょろきょろと見回した。西側の壁、木製の十字架の下には、石は妊娠した女性の腹のように膨らみ始めた。十字架は床にガタガタと音を立てて落ちた。石塊は壁から剥がれ落ち、集まって一つの塊になった。解剖学的形態。すると、その異形は、流れるような赤い髪と真っ黒な目をした裸の女性の姿へと変貌した。イナゴのような導入部は飛び去り、その女性は、フェストノー修道士を実を結ばないミイラに変えたのと同じ、おぞましい笑みを浮かべて姿を現した。

ラザロは耳を覆っていた手を離し、頭を上げた。目の前には母ルシファエルが立っていた。真実が語られているのが感じられた。ラザロは彼女の胸の深紅の輪を見つめていた。そして、それらは大きく見開かれた、恐怖に満ちた目のように彼を見つめ返していた。

「ラザロよ、顔を背けろ !」イワンは命じた。ラザロは再びテーブルに頭を伏せた。

「「ねえ、神父様。私はそんなに醜いの ? あなたを喜ばせられなかったの ?」彼女は多くの女性の声を代弁するように尋ねた。

「私たちを置いていく。ここには置いていかない。」

「エルジョに彼の母親のことを話さなかったのか ?」

「敬意というものがいいのか ?彼はただの子供だ。神の名において、女よ、出て行け。」

「そんな風に挨拶しなくてはならないのか ?私が君たちに与えたものを見てみる。」彼らはラザロを一瞥し、また視線を戻した。

「彼は神に属する。」

彼女は微笑み、身をかがめて両腕を広げた。「さあ、さあ。お母さんのところへおいで、ラザロ。あなたが私を呼んだから、ここにいるわ。お母さんを抱きしめなさい、息子よ。」

ラザロはゆっくりと頭を上げ、再び彼女の胸を見つけた。それはゆるやかに垂れ下がり、豊満だった。双子の乳房は彼女の下で優雅に揺れていた。

「ラザロ !」イワンは彼を叱責した。

ラザロは頭を垂れ、餌入れに向かって言った。「彼女が私の心に入り込んでくる、修道士よ。私は感じる

彼女は 息をしていない 生きていない。

「お願いだからやめてくれ」とイワンは懇願した。

ラザロは首を振り、再び鉢に向かって言った。「なぜこんなことをするのですか？」

「彼を放っておけ！彼はまだ子供だ！」イワンは怒鳴った。

ルシファエルは立ち上がり、イヴァンに反論した。「獣め、お前に命令などできない。黙っている、さもないとお前の目が永遠に舐め出されるぞ。」

イワンはラザロの前に立ち、「お前は全能の神なしには何も命じられない」と唾を吐きかけた。

彼女は黒い瞳で彼を睨みつけ、「私を試さないで、獣よ」と言った。

ラザロは再び顔を上げた。イワンの向こうに、彼女の裸体の半分が見えた。あらゆるグロテスクな女と同じように、彼女にもへそはなかった。彼の視線は彼女の青白い腹を伝い、太ももの間に落ちた。彼女は少し体をひねり、ラザロにその全貌を見せつけた。罪が彼を熱くさせた。

彼の血管は熱く燃え上がった。彼女はにやりと笑った。

「汚れたしもべよ、汝を縛る我らの主キリストの名によって、去れ。」

ルシファエルは笑いながらイヴァンに反論した。「召使いだと？縛られているだと？よく聞け、獣め。お前のキリストを縛り、試練を与え、鞭打ったのは私だ。彼の体に釘を打ち込んだのも私だ。」

手足。彼の脇腹を切り裂き、彼を嘲り、もろい茨で王冠を授けたのは私だ。彼を試したのも、私を証ししたのも私だ。哀れな虫けらのように彼を永遠の書物に押しつぶし、今あなたが受け入れていると主張する信仰そのものを創造したのは私だ。私は束縛されたしもべではない、愛しい聖人よ。イエスがそうされたように、私を証しなさい。

そしてラザロがしたように。」

イワンは彼女の視線を追った。ラザルスもまた、彼女を見つめていた。

「ラザロ！」イワンは彼を叱責し、さらに視界を遮った。ラザロは頭を垂れ、両手で仮面を覆った。彼女は顔を天井に向け、部屋中に千もの不気味な笑い声を響かせた。

そして彼女は言った。「私のエルジヨはあなたよりもずっと男らしいけれど、そもそも男なんかじゃないわ。」

「悪魔よ、最も聖なる主とキリストの名において命じる、この場所から立ち去れ

「神よ！」イワンは叫んだ。

彼女は声を変え、イワンになりきって言った。「私はこの壁の中の石ころほども神の人ではない。ラザロは私の囚われた情欲の産物であり、私の不貞で裏切りに満ちた腰の罪なのだ。」

「ラザロ、耳を塞げ！」イワンは自分の声を真似て叫んだ。ラザロは耳を塞いだ。

彼女は彼の代わりに話し続けた。「彼は毎日、言葉もなく私に思い出させてくれる。ラザロは私の罪悪感に溺れている。

彼を見ると、自分自身を見ているような気がする。私は自分の信仰を彼に押し付けている。」

彼のためではなく、私のために。彼は私の罪が受けるべき苦しみと同じように、義の苦しみを受けるだろう。時が来れば、ラザロは完全に溺れ、私の罪を洗い流し、私は清められるだろう。」

「もうたくさんだ！神の名において、我々の前から消え失せろ！」とイワンは怒鳴った。

ルシファエルは彼女の声を以前の彼女に取り戻した。「おそらくあなたは自分の罪悪感に溺れ、ラザロは彼の罪悪感に溺れたままにしておくべきでしょう。」

ミイラの穴から あらゆる死体の背後から ネズミの大群が部屋に押し寄せた。数百匹の死体が穴から溢れ出し、黒い毛皮の沸騰する海となった。脂ぎった病んだ毛から悪臭が立ち上り、部屋の呼吸可能な空気を吸い尽くした。ろうそくの炎は消え、地下室は真っ暗になった。ラザロの瞳孔は大きく見開き、剥がれ落ちた。幾重にも重なる影を抜けると、彼は母親がいたずらっぽい笑みを浮かべながら自分を見つめているのを発見した。彼女の輝く黒い瞳は、二人の間の闇よりもさらに黒かった。

ネズミが群れをなして溢れ出した。ぎょろっとした目、ギシギシと音を立てる歯、針のような爪、そして鞭のようにしなる灰色の尻尾が床の隅々まで覆い尽くした。汚れた爪が床をカチカチと音を立てて動き回り、まるで百万匹のサソリの足がカチカチと音を立てているようだった。ネズミたちの金切り声は一つに混ざり合い、狂ったように身をよじった。ネズミたちはイワンのサンダルに群がり、虫たちは彼のローブの内側に這い上がってきた。彼らは彼を引っ掻き、かじりついた。イワンは叫び声を上げ、虫の塊をむしり取った。彼は床に崩れ落ち、疫病の黒い海に溺れ、肉体を洗い流された。

突然、部屋は静まり返り、イワンは空っぽの床で暴れ回った。女は彼の上に立ち、笑っていた。幻影は消え去ったが、引き裂かれた肉体の激しい痛みは彼に残っていた。ラザロはイワンを床から起こそうと奮闘した。イワンは横向きに転がり、嘔吐した。ラザロは立ち上がり、仮面を引き剥がした。彼はイワンを跨ぎ、耳を後ろに倒し、分厚い犬歯をむき出しにしてシューシューと威嚇しながら、女に反抗した。女は眉をひそめ、困惑した犬のように首を少し傾けた。そして、唸り声を上げながら飛び出し、ラザロを叩き飛ばし、ミイラの穴の一つに叩きつけた。そして意識を失って倒れ込んだ。

彼女はかがみ込み、彼の髪の毛を掴んで頭を引っ張り上げた。彼女はイワンの耳元でささやいた。多くの女性の声、「誰を証言すべきかを知りなさい。このことを心に留めなさい。私の畑では、石はあなたが不思議に思うべきものではない。私はあなたが不思議に思うべきものではない。エルジヨはあなたが不思議に思うべきものではない。」そして、通りすがりに他人の運命に干渉する者は、竜の尻尾をつかむ者に似ている。」

彼女は頭を下げ、立ち上がって冒涇の言葉を続けた。「確かに、私に証言してください、

イエスはそうしました。私はルシファエル、天使の中の天使、軍団のリーダーであり、あなたが決して集めることのできないものに対する正当な権利を持っています。あなたがまだ私のものじゃなかったら、ここであなたを終わらせて、

「さあ、私のことに口出しするな、獣め。」イワンは激しくえずき、意識を失った。

彼女は振り返り、千匹のイナゴの羽音とともに、壁をすり抜けていった。そして、漆喰の部屋には静寂が漂った。まるで墓所のような、死を思わせる静けさが。

～*～

オディーノ修道士は、盗んだ食料約5日分を修道士の寮に隠し、できる限りの偽りの無関心さを装いながら中庭を横切った。彼は地下墓地の入り口がある建物の脇の入り口からこっそり中に入った。メインの廊下を進むと、兵士たちが正面の入り口から入ってくる音が聞こえた。

行進する足音と金属の鎧がぶつかり合う音にかき消されそうになりながら、ボーン大尉の声がかすれて叫んだ。「3人全員だ！背の高い奴、太った奴、そして仮面をつけた従者だ！」

全てのトンネル、全ての地下墓地を搜索せよ！奴らを捕らえたら、浴場に拘束し、直ちに私に報告せよ！」

「はい、船長」と声が返ってきた。

「さあ、寮へ行こう。男たちは私について来なさい。」

兵士たちが隊列を二手に分けると、オディーノは深いアーチの陰に身を隠した。一隊は地下墓地へと続く通路を横切り、残りの兵士たちと共にボーンは向きを変え、まっすぐオディーノに向かって行進した。オディーノは腹を引っ込め、隅に身を寄せ、息を殺した。手の届く距離、髪の毛一本数えられるほどの近さで、兵士たちが次々と彼の横を通り過ぎ、建物から出て行った。

オディーノは彼らから慌てて逃げ出し、周囲を警戒しながら脇の入り口からこっそりと抜け出した。彼は裸同然だった。200匹の飢えた狼に囲まれた輝く豚のように。彼は夜の闇に紛れ、修道院の外壁に隣接する常緑低木の列の陰に身を隠し、枝の絡み合った隙間から中庭を巡回する兵士の小隊を覗き込んだ。息を切らし、澄んだ空気の中で吐く息が霧となって立ち上る中、オディーノは壁の石にもたれかかり、勇気を振り絞った。そして弱った膝を震わせた。隊長の部下たちがイワンを見つける前に彼を見つけなければならない。ラザ口のフードを被ったままでいなければならない。

しかし何よりもまず、彼は太った男のように息を整えなければならなかった。衝撃的で、身の引き締まるような思いで、彼は自分が数で劣勢であり、身を隠す場所もなく、他に何もする時間がないことを知っていた。

息を切らして、おそらく急速に展開する本格的な悲劇へと発展するだろう。

オディーノのサンダルの下約30フィート、地下墓地の奥深くにある扉は

バストンの地下納骨堂がこじ開けられた。揺らめく松明が暗闇を照らした。「奴らを捕まえた！この中にいる！」松明を持った男が廊下に向かって叫んだ。床に横たわっていたイワンは、押し寄せるブーツの音に身じろぎした。兵士たちが納骨堂になだれ込んできた。二人の衛兵がイワンを担ぎ上げた。

「太った修道士、オディーノはどこだ？」と兵士の一人が彼に尋ねた。別の兵士が床に落ちていたラザロの仮面を見つけ、イワンを尋問していた男に渡した。死体の向こう、暗闇に包まれた一對の深い青い目がこちらを見つめていた。

「少年はどこだ？これが彼のマスクだ、そうだ」兵士は彼に尋ねた。彼は墓場のネズミのように静かに頭を下げ、余ったローブを頭から脱いだ。

数人の男が懐中電灯で部屋を照らしてみると、壁に並べられたミイラの列以外、部屋はがらんとしていた。イワンはミイラの後ろに、ラザロの真新しいローブが少し動いているのを見つけた。

「転んだに違いない。血は出てるか？ほら、ここを見てもろよ」イワンはそう問いかけ、彼らの松明の光を自分に向けさせた。

「いいえ。なぜあなたはこんな墓の中にいるのですか？」

イワンは顔をこすり、兵士たちの横をよるめきながら通り過ぎてドアに向かった。武器を取り出して彼を止めた。

「祈りに来たのですが、暗闇の中で倒れてしまいました。道が分からなくなりましたのです。」

「この仮面は何だ？少年はどこにいる？」

「ああ、彼はそういう仮面をたくさん持っている。その仮面はもう使い古されて、ただのぼろ切れだ。ラザロは閉じ込められてイワンは無理やりドアまで行った。「お願いだ、ちょっと外の空気を吸わなきゃならないんだ」男たちは彼は最後に一度だけ地下室をちらりと見て、しぶしぶ彼の後について出て行った。

「少年の宿舎はどこですか？」と兵士は尋ねた。

「この廊下を進み、右に曲がると、左手にある最初の部屋が彼の部屋です。」

「それで、修道士のオディーノはどこにいるんだ？」

「最後に覚えている限りでは、彼は寮の独房にいたはずだ。ラザルスの様子を見に行かなければ。」イワンは兵士たちから身をよじて離れた。兵士たちはさらに強く彼を掴んだ。

「私の命令は、あなたを逮捕することです、修道士よ。私と一緒に来なさい。」

「何だって？！逮捕だって？！一体何の罪で？」イワンは信じられないといった様子で尋ねた。

兵士は他の兵士たちに「全員、搜索を続ける。少年の宿舎だ」と指示した。

彼はイワンの方を向き、「申し訳ありませんが、修道士様、私もあなたと同じくらい辛いのです。私はただ命令に従っているだけです。どうかおとなしくお越しください」と言った。イワンは快く同意した。

ラザロにとって、去っていく兵士の声は、彼がそこに留まっている間、遠いこだまのように消えていった。地下納骨堂には、同じように石化した司祭の遺体の下に石化した状態で横たわっている。

バストーン家の地下納骨堂に眠るクレアリーズ・バストーン修道院長。その遺体は、ゲートストーンと言語と秘密を永遠に葬り去ろうと、ナラムシンをベニオンのトンネルに封印した司祭のものであった。そして今、バストーン修道院長の遺体そのものが、ラザロがすぐに発見されるのを防ぐ役割を果たしていた。ラザロは遺体の下に完全に隠れていたのだ。

1347年10月1日

ラザロとイワンのどちらの心境も似ていた。「それはいつもと違う日だった」夜明け前の鐘楼からの朝の晩課の鐘の音も、食堂での食事の呼び声も、夕方の寮での瞑想と祈りのための印象的な鐘の音も、修道院には存在しない。永遠に神聖な祈りと労働のスケジュールに関して、修道院内には規則性やルーティンの痕跡は全くなかった。死のように静まり返った大聖堂の鐘の下では、奇妙なほどに賑やかな修道院の壁の中で、時間そのものが完全に止まってしまったかのようにだった。ラザロとイワンは互いに離れ離れに閉じ込められていた。ラザロはもろく、絶えず軋む死体の下で身動きし、イワンは警備された修道院の浴場に捕らわれ、容易に逃げ出す手段はなかった。

一日を通して、二人は修道院の周囲の音を同じように聞いていた。普段は静まり返っているはずの地下墓地の壁には、兵士たちの叫び声や口論、時折聞こえる笑い声さえもこだましていた。普段は静かに瞑想する修道士たちの声が響くはずの修道院の中庭には、敷地内は騒々しい兵士たち、息を切らす馬、そして金属がぶつかり合う音で賑わっていた。

しかし、彼らの苦しみには大きな違いがあった。ラザロは死んだ司祭の下敷きになり、その湿った息で狭い空間が息苦しいほど熱くなった。汗が蒸し暑いローブの下から流れ落ち、古い死体の下に溜まった新たな湿気が腐敗臭を強烈に呼び起こし、ラザロの狭い空間を腐敗臭が広がる、触れることのできる死装束のように満たした。一方、イワンは用心深い兵士たちの後ろに立ち尽くし、石造りの浴場の冷たい空気の中で凍死寸前だった。ローブとサンダル以外にほとんど防寒具を身につけず、浴場のプールの周りをぐるぐる歩き回った。かつてズキズキと痛んだ指や足の指の痛みはもう感じられず、まるで手足が存在しないかのようにだった。

ラザロとイワン、二人にとって、共通の苦しみの中で、時間はまるで終わりのない、悲惨な一日を通してゆっくりと流れていった。やがて、夕暮れと深い影が修道院を覆い尽くした。

二人の兵士が浴場の正面入り口の外に立っているのを見て、イワンは再び深く狭い窓を見つめた。「少年なら簡単に通り抜けられるが、

「あの体格の男なら、彼は石造りの池の縁に腰掛け、これまで幾度となくそうしてきたように、警備された入り口を見渡した。いまだに脱出の手段は見つかっていない。
男の一人が浴場に入り、イワンのそばを通り過ぎた。建物の奥の角で、彼は一段高くなった台に立ち止まり、木製の覆いを押し退けて用を足した。そして肩越しにイワンに尋ねた。「それで、なぜ逮捕されたんだ？」
イワンは皮肉っぽく言い放った。「お前の隊長の告白など聞かなくてもいい。」
警備員はくすくす笑い、穴の上にブロックを元に戻し、ドアの外の持ち場に戻った。彼はもう一人の警備員に何かを呟き、もう一人の警備員はちらりとイワンを覗き込み、笑った。

「シーッ！」裏壁の窓からシューッという音がした。オディーノの頭が狭い穴に突き出た。

イワンは窓辺に駆け寄り、「神に感謝！オディーノ、ラザロはどこだ？」と叫んだ。

「まだ地下墓地にいるようだ。警備兵はまだ我々を見つけていない。」

「オディーノ。よく聞け。ローブをたくさん持ってこい。両腕いっぱい。」

「寒いですか？」

「やれ、オディーノ。急げ。」

オディーノは姿を消し、やがて戻ってきて、布の塊を窓から押し出した。

「西側の壁の茂みの向こうに隠れている」とオディーノは囁いた。

「よし、行け！」

オディーノは姿を消した。

イワンはローブの一枚を小さな窓から半分ほど出し入れした。それから彼は彼はローブをほどき、残りの布でローブの空洞、袖、フードを詰め込んだ。彼はローブベルトをダミーにベルトのように巻き付けた。そしてダミーの背中を支えて警備員たちを振り切り、彼は浴場の奥へと歩み寄り、便所の木製の蓋を外し、台全体を後ろに傾けた。彼は汚れた土の穴に這い降り、台を自分の上にゆっくりと戻し、開口部の上に木のブロックを慎重に元の位置に戻した。

数分後、彼は足音と、2人目の警備兵が即席のマネキンに問い詰める声を聞いた。「それで、あなたは隊長の告白を聞くことを拒否したのですか？」兵士は笑った。

衛兵が便所から木製の台を持ち上げると、イワンは後ろにもたれかかり、穴から覗き込んだ。衛兵は身支度を整えた。そして、衛兵は準備を始めた。イワンは顔をしかめ、ローブの前が温かく濡れた状態で落ちてきた。

兵士は肩越しにダミー人形をちらりと見てから続けた。「悪魔でさえもあえて」

流れが止まった。警備員は飛び退いた。

「ああ！彼は行ってしまった！修道士は行ってしまった！」

最初の警備員が駆け寄ってきた。二番目の警備員は窓際のローブを指さし、「逃げたぞ！」と叫んだ。

「小さすぎる！どこかに隠れているに違いない！」

彼らは浴場をくまなく搜索し、隅から隅までひっくり返した。その時、二人目が口を開いた。「奴は逃げたぞ！隊長は、まだ逃げている他の二人の首を刎ねるつもりだ！ここで時間を無駄にするな！」二人は一緒に戸口から飛び出し、建物の周りをぐるりと回った。イワンは木製の便所を押し倒し、穴から這い出して逃げ出した。

まもなく、イワンはオディーノが茂みの中へ手招きしているのを見つけた。オディーノは不機嫌そうな顔で彼を迎えた。「何をやらかしたんだ？」彼は鼻と口を手で覆った。「何かやらかしたのか？」

「すでに多くの者が亡くなっている。今はその時ではない、オディーノ。」

冷たい夕暮れの空気の中、二人の吐息は白く曇った。オディーノはイワンから身を離し、顔に残る悪臭のせいで顔をしかめた。

「オディーノ、何を知っているんだ？全て話せ。」

「枢機卿はゲートストーンを開放するつもりだと聞いています。彼は今大聖堂にいて、クロディウス、グレヴィル、グレート。彼は修道士と従者を寮に閉じ込めるよう命じ、隊長は全ての入り口の警備を倍増させた。

「ラザロがここにいたら、彼らがそれを企てるのは極めて危険だ。我々は彼を連れてこなければならぬ。」

「今夜、修道院を出発します。あなたも一緒に出発しますか？」

"確かに！"

「では今夜、マウンテンズマウスに向けて出発する。食料と水は確保できたか？」

「イワン、食料は私の独房にある。だが、警備兵を通り抜けることができない。」

「それなら食料なしで行くしかないな」とイワンは星空を見上げながら言った。「今すぐラザロを連れてこよう。」

「彼は一人で地下墓地を出たはずがない」とオディーノは言った。「もしかしたら井戸の穴に隠れたのだろうか？彼は身を隠したのだろうか。」

「彼はバストンの地下墓地にいる。ここにいろ。」イワンは彼の横を足を引きずりながら通り過ぎ、茂みを抜けて、地下墓地のある建物の脇の入り口へと駆け寄った。入り口。

するとオディーノは建物の向こう側から怒鳴り声が聞こえてきたので、茂みの隙間から様子を伺った。ボーン大尉と松明を持った多くの警備兵が角を曲がって現れた。ボーンはあちこちを指さしながら指示を出し、「建物を封鎖しろ！お前ら4人はあっちに並んで！背中合わせの持ち場を取れ！お前ら全員、反対側で持ち場を離せ！6人はここに残れ！全てのドアと窓をしっかりと閉めろ！残りの奴らは俺について来い！動け！」と叫んだ。

すると船長は、まだ叫び続けていたが、今度は独り言のように付け加えた。「彼の逃走を許したのだ！」
「無能な野郎どもめ！」兵士の大群が建物の正面入り口に押し寄せ、他の兵士たちはイワンがつい先ほど建物に入ったばかりの側面入り口を警備した。
彼自身。

オディーノは頭を壁に打ち付け、目を閉じ、歯を食いしばり、石に拳を叩きつけた。悲劇は完全に終わった。

イワンはラザロを叫びながらメイン通路を駆け下りた。ほぼ同時に、ラザロはバーストン地下墓地へと続くトンネルの角を曲がって現れた。二人は両腕を広げて抱き合った。

イワンは彼を引き剥がし、肩を揺さぶった。「聞け、ラザロ！私の言うとおりにしろ！」
わかりますか？"

「はい、父上。」

「さあ、出発だ！立ち止まるな、話すな！急げ、そして私のそばを離れるな！」
イワンは彼を解放し、振り返ってトンネルを駆け上がった。ラザルスはまるで背中の曲がった小人の幽霊のように、すぐ後ろをついて行った。二人は階段のある通路の角を曲がると、急に立ち止まった。

彼らの前に、ボーン大尉が大勢の兵士を引き連れて階段を降りてきた。

「もう十分だ。追跡は終わったぞ、神父。」

イワンはラザロの前に立った。「もう絶望的だった。」

彼は肩を落とした。「平和的に行きましょう。」イワンは無理に笑顔を作り、敬虔な修道士のように頭を下げて両手を合わせた。

「もちろんだ。さて、太った奴はどこだ？」

「オディーノ修道士？」

"同じ。"

「彼の居場所は知りません。」

ボーンはイワンの顔に近づき、「本当は今頃修道院長と一緒にいるべきなんだけど、今は二人の不適格な修道士とせむしの従者を追いかけて回しているんだ。お前は私を困らせに来たんだな。さて、司祭は全員寮にいるし、太った司祭以外は全員揃っている。それに、お前が逮捕される前に浴場に司祭のローブがなかったことも知っているし、もう一度お尋ねします。彼はどこにいるのですか？ 回答をお待ちしています。

「先ほど申し上げたように、私はどこにいるのか分かりません」

ボーンは背を向け、くると向きを変え、イワンの顎に拳を叩き込んだ。ラザルスはうめき声を上げた。

「ラザロ！」イワンは彼を制止した。イワンは突進し、拳を握りしめて隊長の顎に殴りかかり、周囲の注意をそらした。ボーンが痛みを和らげている間、警備兵たちはイワンを取り押さえた。

「ああ、情熱を秘めた司祭だな」ボーンは歪んだ唇から血を拭いながら言った。そして部下たちに「彼を脇にどかせろ。少年の声はまるで獣のようだ」と命じた。

警備員たちは抵抗するイワンを押し戻した。ラザルスは飛び退き、虚ろな目穴でボーンを見上げていた。

「平和的に行こうと言っただろう」とイワンは吐き捨てた。「ただ、あの少年には危害を加えないでくれ！彼は病気なんだ！」

数人の衛兵が退却した。しかし、隊長は毅然とした態度で立ち、「あいつの顔を見たい」と呟いた。そして、一番近くにいた衛兵に「お前。マスクを外せ」と命じた。

「だめだ！そんなことしちゃだめだ！」イワンは叫びながら、息を切らした。

兵士はラザロのフードをつかんで引き剥がした。恐れおののいた兵士たちは散開し、抜かれた武器がぶつかり合う音。

「シューッ！」ラザルスは後退するボーンに向かって唾を吐きかけた。青い目は大きく見開き、黒い髪は乱れ、長い耳は平らに押し付けられ、牙は威嚇するように突き出していた。

「悪魔の子だ！」と一人が叫んだ。他の者たちは畏敬の念を込めてつぶやいた。

「だめだ！」イワンは拘束を解いて、一番近くにいた警備兵を壁に叩きつけた。数人の警備兵が彼に群がり、彼は狂った巨人のように彼らを振り回した。部屋が混乱に陥る中、ボーンはイワンに突進し、白い柄の短剣を彼の肋骨の下に突き刺した。イワンは息を切らし、よろめきながら後ずさった。彼は大声で叫んだ。「逃げろ、ラザルス！」

ラザロはナイフと血、そして何か イワンの目には恐ろしいものに映るもの を目撃した。

「キーッ！」ラザロの鷹のような叫び声が空気を切り裂いた。耳をつんざいた兵士たちは呆然と立ち尽く

した。イワンは床に崩れ落ち、「逃げ、坊主！今だ！」と叫んだ。カタコンベの入り口は完全に封鎖され、ラザロはくると回転し、燃え盛る亡霊のようにメイン通路を駆け抜け、トンネルの奥深くへと飛び去った。

兵士たちは突然立ち止まり、武器を下ろし、呆然とした表情で互いに顔を見合わせ、イワンとボーンをじっと見つめた。ボーンに向かって、イワンはうめき声をあげた。「彼は悪意はない。心は神と共にある。頼むから、彼を放っておいてくれ。行かせてくれ。」それから彼は首を回し、ため息をつき、壁のひび割れ以外何もない空間を、眠たげな虚ろな目で見つめた。

その後の沈黙の中、ボーンは視線を上げ、部下たちが自分の手に持った短剣をじっと見つめているのに気づいた。短剣の刃には司祭の血が染み付いていた。彼は突然それを拭き取り、鞘に収め、沈黙を破った。「行くぞ」。彼は向きを変え、階段を上っていった。部下たちはまるで死の海が割れるように道を譲った。彼は立ち止まり、部下たちに言った。「彼を逮捕しろ。剣や刃物を使うな。あの悪魔の少年を無傷で連れて行け」。部下たちは彫像のように、彼の周りにじっと立っていた。

"今！"

軍曹は「隊長の命令を聞いたな !動け !」と答えた。兵士たち¹ 彼は走り出した
は剣を鞘に収め、彼の後について中へ入っていった。軍曹の反響する命令がトンネルの奥へと消え
ていった。「お前たち3人はあっちへ行け !扉を点検しろ !お前たち2人はあっちへ行け !あらゆる
隙間を探索しろ !」

階段の踊り場で、ボーンは独り言と部下たちに呟いた。「まともな司祭が獣を庇護するはずがない」。彼は6人を呼
び集め、「お前たち、私について来い。中庭で私の部隊を準備しておいてくれたと信じているがな」と言った。

それに対し、そのうちの一人が「はい、隊長。体格のいい男が百人、命令を待っています」と答えた。

ボーンは肩越しにイワンの遺体をちらりと見て、目を細めると、階段を駆け上がった。

「もう終わりにしよう。」

【第6章終了】



この文学作品は

d専ら献身的に

エドガー・アラン・ポー (1809年 - 1849年)

—彼の遺志が私たち一人ひとりの心の中で生き続けることを願います—



~[GothicNovel.Org](https://www.gothicnovel.org)~